

師走と首都圏の大雪（協同組合通信/日和見） 14.12.11

時の過ぎ行く様を、古来から多くの哲人や文学者が書き記している。

かの兼行法師は、水の流れる如しと、徒然草で述べている。

早24節気の「大雪（たいせつ）：雪が激しく降る頃」の侯である。

最新の地上天気図を見ると、いつしか、冬将軍の訪れを告げる西高東低の気圧配置へと変わって来た。この配置になると、等圧線が込み合って、上空の寒気次第で、列島に大雪をもたらす。

この冬将軍は、関東地方のとりわけ首都圏や太平洋側の大都市に、すさまじい自然の猛威を發揮することとなる。

出口の見えないデフレスパイラルに、民主党党首の一人相撲まで飛びこんで、師走の巷は苦笑に満ちるが、政界は冷めている。

このところ、数センチの積雪で、交通網が大混乱する首都圏に、雪の降る「大雪」でなくて、ほっとした。昨今、道路公団の民営化問題で、JRの大物を含む7人の侍が活躍しているが、東名阪の大都市サラリーマンの通勤の足は大丈夫か。総武線などの大雪対策は、今から万全を尽くしておく必要がある。この冬こそは、わずか数センチの積雪の重さで、信号機故障となり、タイヤがぐしゃぐしゃになるような、前轍を踏まないことを期待する。

気象庁の大雪警報の基準値は、地域によって異なっている。ちなみに、申し上げると、札幌は50cmで東京は20cmとなっている。いずれも降り始めから24時間の降雪の深さをいう。

ここ数年の実体から見ると、東京では、5cmの大雪注意報程度の降雪（雪国では到底考えられない、かすかな降雪量）でパニックである。

雪に不慣れな太平洋側のノー天気なマイカーや初心者の車が、あちこちの坂道で立ち往生し、乗り捨てられているのに啞然とする。

JAFの電話がひっきりなしに鳴り、職員とレッカー車や救急車は大忙しとなる。

エルニーニョの影響の読みは難しく、先ごろ発表された気象庁の3ヶ月予報が見直された。師走の暖冬を一転して訂正し、寒い12月になりそうだ。

経済の活性化を願えば、このところ低調気味のスキー場に、恵みの大雪が降り、街中には、雪焼けした若者が溢れると良い。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）